



巻頭特集 「深川」発祥の地

深川神明宮の歴史

森下にある深川神明宮は約420年続く、深川で最も古い神社だ。今や観光・グルメ・お洒落なカフェ巡りなど、様々な顔を持つ「深川」だが、その発祥の地がこの深川神明宮であることを知らない方もいるのではないだろうか。



▲深川神明宮例大祭の様子。森下交差点では各町とも神輿を高々と差し上げ、解散場所の森下清澄通りに12基の神輿が勢揃い。氏子1万人による盛大な大手締めで祭りは幕を閉じる。

水かけ祭り 深川神明宮例大祭

深川神明宮例大祭は、毎年8月に氏子町内の平安を祈願して行う。氏子十二ヶ町は江東区森下・高橋・常盤・新大橋の11町と墨田区千歳3丁目のこと。今年は3年に一度の「本祭り」で、神幸祭(宮神輿の町内巡幸)や町神輿連合渡御(勢揃い)などの盛大な祭礼行事が8月10日から12日までの3日間にわたり行われる。8月10日の夕方に行われる稚児行

列祭は、無病息災を祈る日本の伝統行事で、大勢の子どもたちが可愛らしくも華やかな稚児の装束に身を包み、町を練り歩く。この行事を通して「深川」の子どもたちの健やかな成長をお祈りしている。

また、8月12日には十二基の町神輿が氏子町内を巡幸し、沿道から盛大に清めの水をかける「水かけ祭り」で有名な祭り。屋過ぎに清澄通りに十二基の神輿が並び、担ぎ手・参拝人合せて1万人の大手締めで3日間の祭礼を締めくくる。



▲深川在住の画家・アラノヒトミ氏による深川発祥の絵図。徳川家康公と八郎右衛門が対面し深川の地名が名づけられる場面を描いている。

深川の発祥は 深川神明宮から

「深川と聞くと門前仲町の辺りを連想される方も多いと思いますが、実は深川発祥の地は、この深川神明宮なんです」と教えてくれたのは深川神明宮宮司の内野さん。

近年、深川森下は江戸情緒の豊かな歴史ある町であると同時に、都心に隣接する利便性の良い地として大変人気で、古き良き伝統と新しい文化の融合が進む街だ。そんな森下駅を出て歩いて3分、静かな住宅街に深川神明宮がある。

今からおおよそ420年前、この一帯は葦の生い茂る三角州だった。その頃、深川八郎右衛門という人が大阪府北部から一族を連れて移り住み、現在の森下付近を開拓した。八



▲今回、取材させていただいた深川神明宮 宮司の内野さん

が進められ、永代寺や富岡八幡宮が創建された。永代寺の門前は料理屋や屋台の並ぶ繁華街になり、多くの人が訪れる地域となった。まさにこの深川神明宮が深川発祥の地であり、ここから今日の「深川」の発展が始まったのである。

深川の地を守るため 途絶えてしまった深川家

初代・八郎右衛門が亡くなった後、深川一族は代々深川二十七ヶ町の名主を務めてきた。ところが宝暦7年(1757年)、7代目・深川八郎右衛門の時に、名主を務める町で会計処理に関する不正事件が発生し、裁判沙汰となった。当時はこの様な場合、周辺地域一帯の責任となるのだが、7代目八郎右衛門が罪を一身に引き受けて入牢。やがて病死したため、深川家は七代目をもって絶えることとなった。自らの身を捧げ、深川の地を守ったのである。

深川氏累代のお墓は、市川市国府台に移転した泉養寺にある。泉養寺は深川八郎右衛門の兄、秀順法印により建立されたお寺で、今も毎年慰霊法要が行われている。

氏子町と共に歩む 深川神明宮のこれまで

明治14年に神社は火災に遭い、氏子町内のほとんどを焼失したという。しかし各町が長い年月をかけ神社を復旧させ隣地を購入し、境内を広げていった。その後も関東大震災や東京大空襲など窮地に見舞われたが、その都度各町の努力によって復旧してきたという。

昭和25年には境内に神明幼稚園が併設された。約6千名の卒園児を送り出し、今も境内には元気な子どもたちの歓声が響き渡る。また平成13年には境内に並ぶ氏子十二ヶ町の神輿庫のトビラに、若きアーティストたちが描いた各町自慢の神輿絵が奉納された。

現在の深川神明宮では節分祭や春祭・秋祭など一年を通して祭事が行われている。共に復興した氏子十二ヶ町を中心に地域と共に歩み、今も深川の平和を静かに見守っている。



▲平成13年には各町自慢の神輿絵をアーティストたちが描いた。



▲時には商店街のイベントのために境内を開放している。

今回お話を聞いた取材先

深川神明宮

住所 江東区森下1-3-17
交通 都営新宿線・大江戸線「森下駅」A7出口徒歩3分
Web www.fukagawa-shinmei.com/

■イベント
深川神明宮例大祭 8月10日(金)~12日(日)
町神輿連合渡御 8月12日(日) 8時~13時
(氏子12カ町の町神輿が勢揃い)